（別紙２）

審査の結果の要旨

氏名　堀江宗正

堀江宗正氏の「心理学のなかの「宗教」――ポスト「宗教」・ポスト世俗主義の心理学的思想運動」は、宗教を心理学的に論じながら、伝統的な「宗教」の機能を引き継ぐような学問・思想を展開した心理学者・思想家群を論じた野心的な業績である。１９世紀末から２０世紀中葉にかけて活躍した心理学者・思想家、まずはＳ．フロイトとＣ．ユング、そしてW．ジェイムズ、Ｅ．エリクソン、Ａ．マズロー、Ｅ．フロム、Ｖ．フランクル、Ｊ．ヒルマンなどの学問・思想が「宗教」との関わりにおいて論じられていく。「宗教としての心理学」と見なす立場もあるが、この論考では「宗教」とは異なるが「宗教」に深く関わる現代的な学問・思想として取り上げ論ずる独自の立場が提示される（序章)。

彼らの仕事は宗教心理学と理解されることが多かったが、むしろ「宗教」にかわる「自己実現」の道を説いた思想として考えられる。そう理解することで、「宗教」と世俗主義の双方に距離をとろうとする、現代人の生き方や考え方の反省に貢献できるという。(第一章)。第二章から第五章までは、「儀礼論」「現代社会論」「死生観」が取り上げられる。儀礼は集団を通して心理的安定をもたらす機能を果たしてきたが、心理学的思想家は儀礼を遊びへと変容させて癒しをもたらそうとする（第二章)。また、現代社会は自律を促しつつ隠れた他律を招きがちだが、彼らは抑圧的でない欲望のケアによって権威主義的な態度を克服する道を示そうとしてきた（第三章)。また、彼らは宗教的な来世観を断念しつつも、死を超えてなお意味が求められるうることを示した。だが、さらに後の世代に属するキュブラー＝ロスの場合は、はっきりと死後生を肯定する立場へと転じる。心理学的死生観を超えてスピリチュアルな死生観に至る道だ（第四，五章)。

第六章では以上の議論が総括され、第七章からはこうした心理学的思想運動の思想史的宗教史的位置付けが試みられる。形而上学批判を前提に差異や他者性を軸として展開する現代哲学思想との対比（第七章)、アニミズム的な民衆宗教を引き継ぐ「癒し」の運動との関連（第八章)、心理学史の中での無意識論の位置づけや宗教進化論との関連（第九章）が問われていく。第一〇章では総括的な評価が試みられる。Ｐ．リーフ以来の先駆的な「心理学的人間」論、セラピストという現代的性格類型を論じたＡ．マッキンタイアやＲ．ベラーらの批判的評価に学びつつも、堀江氏はＰ．ホーマンズや Ch．テイラーにならって、ポジティブな自己実現論の思想としての側面を重視すべきだとする。ロマン主義的な傾向が自己に閉塞する傾向をもつことを認めつつも、心理学的思想運動全体としては倫理的批判性を失わないものだと評価する。個人化が進む社会でポスト「宗教」・ポスト世俗主義の立場が不可避となるが、心理学的思想運動はその有力な担い手となるのだと論じる。

多くの心理学者・思想家を取り上げ、その学問・思想の意義を的確に評価し、壮大な文脈を設定してその中に大胆に位置づけ、現代宗教研究の新たな領域を力強く切り開いている。総括的であるかわりに個々の心理学者・思想家の理解としては深みに欠ける恨みがあるが、骨太の構想力と広汎かつ丹念な読解作業の積み上げが結合した独創的な論考として高く評価できる。よって、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位を授与するに値するものと判断する。